



姫路市医師会

ほうもん かんご

訪問看護ステーションだより

No.020 2006.7発行

居宅介護支援事業所

姫路市医師会訪問看護ステーション 姫路市西今宿三丁目7番21号TEL079-295-3377



夏は夜。月の頃はさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがいたる…と枕草子のなかで清少納言が言っているように、これからは月夜も闇夜もそれぞれに味わい深い季節です。

闇夜であれば織姫（こと座のべガ）と彦星（わし座のアルタイル）を探し、月夜であれば月の中のうさぎを見つけましょうか。ところで七夕の夜が雨だったら、織姫と彦星は会えないのでしょうか。いえいえ、かささぎが羽を広げて天の川に橋をかけてくれるのだそうです。

複雑になるばかりの世の中、難しい事で心が満杯になってしまわぬよう、ちょっと、道草できるゆとりも、持ちたいですね。



トピックス 4月より介護保険の特定疾病に末期がんが追加されました。

1. 医師会訪問看護ステーションでの症例

Nさんは59才の男性。高齢の母と二人暮らし。知的障害がありながらも、書道、ちぎり絵、音楽鑑賞などを趣味とし、感性豊かに障害者のデイサービスに通う日々を送っておられました。そんな生活の中で末期の肝細胞ガンの告知を受けられ治療のための入院生活を余儀なくされました。近くに住む弟夫婦、九州から介護の手伝いに駆けつけた姉、高齢の母。家族は家に帰りたいがNさんを、急変時には入院するという条件で家に連れて帰ってこられました。退院と同時に開始した介護保険制度での訪問看護。Nさんの希望は「お風呂に入りたい」「家で点滴して欲しい」でした。徐々にレベルが落ちていくNさん。点滴は続けられたものの、入浴ができたのは3回だけでした。そのシビアな状況の中でも家族は「死」をなかなか受け入れられず、最期を家で看取る決意をされたのは「死」のわずか3日前でした。近づく「死」に不安な家族へ「死」の迎え方を指導すると同時に、緊急連絡体制を確認し、不安の解消に努めました。好きな音楽を室内に流し、会いたい人に訪問してもらい、声を聞きたい人に電話口で話してもらい、暖かい家族の愛に包まれながらの自宅での療養生活。看取りの指導をした3日後の日曜日の朝、Nさんは家族に見守られながら、最期の時を迎えられました。

介護保険制度の改正により、第2号被保険者である40才以上65才未満の方の、16番目の特定疾病に、末期がんが追加されました。それにより、Nさんは、ベット、褥創予防マットのレンタルができ、身体的な負担が軽減されました。それに加えてサービス利用の経済的負担が軽減できたことは、大きな利点だったと思います。

介護申請から在宅療養生活までがスムーズに行える様、入院中からのソーシャルワーカーとの関わりや、退院に向けての、在宅主治医、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーションとの連携が、大変重要になってくると思われます。

●訪問看護ステーション MASA ナース

1年に1回は健康診断を受けましょう

●メタボリックシンドローム●

最近流行のメタボリック症候群とは内臓脂肪症候群の事です。ウエスト周囲径が男性85cm以上、女性90cm以上を条件に高血圧、高血糖、高脂血症のうち二つ以上当てはまる場合を指します。平成20年から40歳以上の方が受ける健康診断にこの考え方が導入されます。

私達、医師会の職員は毎年一回健康診断を受けます。(それも決まって正月あけなので体重がほぼ最大の辛い時期...) 検尿に始まり血液検査、レントゲン、ふしめの年には胃の透視他イロイロ...そして2年前からこの腹囲測定も加わりました。さすが検診のプロ。ただ、測定してもらうのが、顔見知りの仲間たち。顔は知ってるけど、ここにきて腹囲まで知られるとは...医療関係の仕事なのでまず自分の健康管理はしっかりとしないではいけません、ありがたいような、恥ずかしいような。しかしこれからは予防医学です。健康寿命が重要ですね。

姫路市医師会では下記の健診事業を行っています。

- 診療所 ……泊ドック、一日ドック、市民ドックなど
- 事業所健診 ……働く人々の健康診断（特殊健康診断から行政指導による健診まで）
- 学校地域健診 ……児童、生徒、学生を対象とした学校健診と検診車による住民健診

最近、お疲れぎみですか？

河合 隼雄氏に聞く、医療現場の人間関係より

(文化庁長官、臨床心理学者)

訪問看護と介護2006年2月号より

視点を变えてユーモアで乗り越える。
いろいろ文句を言いに来る人がいますよね。その時に「もう、嫌になった」と思うのと、「こういう人がいるからおもしろいんや」と思うのでは、ちょっと違うでしょう？ そうやってちょっと変えられると、そこにユーモアがでてくるんですね。そうやってユーモアで乗り越えたり、視線を変えるということは、大事ですね。
被害者意識になると本当に面白くないでしょう。そして、被害者意識を持っている人ほどいじめたくなる。そうならないように、ユーモアのある雰囲気をつくっていくのは、すごく大事だと思います。

患者さんに鍛えられて強くなる
攻撃上手な人はすごいですよ。こっちの弱点を非常によく知っている。でも、「うまいこと来よるわ。よし、そしたらこっちも考えるか」と思ったらいいんです。こっちがパッと対応すると、向こうも「敵もなかなかやるな」と、思っかね。そういう人に鍛えられて、おかげで強くなるんですから、「おかげさんで」と思っかね。それでいいか減忘れた頃になったら、また大人物が現れますよ。

疲れる理由
クレームが来ないようにばかり考えて仕事をしていると、憂鬱になってきます。人間というのは、自分でやりたいことをやっているときは、かなり忙しくても疲れないんです。マニュアルだけに気を使っていたら自分も疲れるし、おもしろくない。マニュアルを自分なりに、どうやって越えかか考えないと...

本人がわかっているときは怒らない
ミスした本人がわかっているときには怒らないことだと思います。しかし、その人が本当はこうできていたはずなのにしてないことは、言うてあげる。「おまえは片手で取りに行っただけ、両手で取りに行っただけがうまいこといんだよ」とか、そういうのがコーチであって、失敗するたびに「しっかりしろ、バカヤロー」って怒っているのは、何もコーチにならない。どうしていいかわからなくて萎縮する。「積極的にやって失敗した時には、私が守ってあげる。」というのが、上司としては、すごく大事です。